

### + 1 3 【ねこまた】

小山で猫を拾いました。

木陰からぼくを見つめていました。

野良猫（のらねこ）なのか捨て猫なのか飼い主がいるのかわかりませんでした。が、（おそらくぼくと同じ年くらいの）年をとった雌猫（めすねこ）だということはわかりました。

飼おうということではなく、尻尾に怪我をしていたので、家まで抱いて行ったのです。

その猫を見て母親いわく、

「あれれ、猫又だね。狐は尻尾が九つにわかれるとばける、猫は尻尾が二つにわかれるとばける」

「しっぽにけがしとるだけじゃ。きつねにやられたんじゃろう」

たしかに猫の尻尾は二つに裂けて血がでています。

ぼくは消毒してから薬を塗り、尻尾に包帯をまきました。

その間猫はずっと静かにしていました。

腹がへって声もでないのだらうと、ごはんを牛乳にひたして食べさせました。

すると翌日は元気がでて、しきりに動きまわります。

でも外へでていく気配はない。

「このままだと家に住みつくね。猫又がばけると大変だよ」

母親は、猫又をもとの小山に捨てに行けという。

ぼくは、猫の傷がなおったらとこたえる。

そんな応酬（おうしゅう）が続いて、猫の傷はなおりましたが、尻尾は二つにわかれたままになりました。

「ばけるぞばけるぞ」

母親は毎日いったものでした。

「ばけろばけろ」

ぼくは毎日いったものでした。

でもなかなかばけそうもないし、何日経ってもぼくが捨てにいかないものだから、猫は家に居着くようになりました。

ぼくはその猫に【ねこまた】と名付けました。

ぼくの期待に背いて【ねこまた】はちっともばけませんでしたが、妙な習性の猫でした。

ふだんはおとなしいのですが、だれか（親戚とか学校の先生とか友達とか近所の人とか行商の人とか）が家にはいってくると、おそろしく唸るのです。

それはそれはすさまじく唸るものですから、みんな蒼白になって、用事も済ませずにすぐに逃げだしてしまいます。

憂憂憂憂憂  
愚愚愚愚愚  
疑疑疑疑疑  
餌餌餌餌餌

あるとき懐爺に相談をしてみました。

「それはやはり【ねこまた】というおばけですね。『徒然草』（つれづれぐさ）という書物にあります。《奥山に猫又といふものありて》と。ですから本当は大山にいるんですね。でも怪我をしたから助けてもらいたくて小山までおりてきた。それほど尻尾の出血は命取りだったんですねえ。そこに金ちゃんがやってきた。【ねこまた】にとっては金ちゃんは命の恩人。いえ、それ以上なんですね。金ちゃんに大恩があるから、ばけない。そのかわりお客さんには、化け猫さながらにおそろしくなるんですね」

「うちの【ねこまた】は、やっぱりおばけかい」

「もしかして金ちゃん、【ねこまた】は女性のお客さんだけに唸るのではありませんか」

「よくわかったのう。そのとおりじゃ」

叔母さん、女の先生、同級生の女の子、隣のお姉さん、行商のおばさん。

みんな優しいひとなんだけれども、【ねこまた】は烈しく唸ります。

それでも近づくものなら、鋭い歯で噛み付きます。

男のひとがやってきても、しらんふりで居眠りをしているくせに。

「【ねこまた】の焼きもちは、はんぱではないですからねえ」

「やきもちたあ、どうということじゃ」

「【ねこまた】は、金ちゃん一途（いちず）ですから、女のひとにはだれであれ、焼きもちをやくんですよ」

「ということは、わしが【ねこまた】にすかれちよるわけかい」

「そういうわけです。【ねこまた】にとっては、【ねこまた】だけの金ちゃんなのです。たぶんじぶんの旦那様（だんなさま）のつもりでいるんでしょうね」

「それはそれでおそろしいのう。わしは女のひとと口もきけんわけじゃな」

「はい。お母さん以外とは、口をきいてはいけません。そばに寄せつけてもいけません。名前を呼んでもいけません。女のひとがでてくる漫画や絵本も見てはいけません」

「どうせわしは、おんなぎらいじゃからいいわい」

強がりを行いました、隣の優しいお姉さんと口がきけないのは残念でした。

ところでその後【ねこまた】は、どうなったかですって。

ぼくが大人になっても、ずっと家に居続け、【ねこまた】がいつのまにか消えた（たぶん小山に帰って死んだのでしょうか）のは、ぼくが三十歳になったときですから、【ねこまた】は三十歳くらいまで生きたことになります。

ぼくが三十歳まで女性にまったく縁が無かったのは、そのせいなのです。